

明治百年

——大衆社会における多様な歴史観とつくられる歴史像——

梨本 紫乃

はじめに

2018年に明治元年から満150年に当たることを記念して、政府が「明治150周年」関連施策を実施したことを機に、「明治百年」にも改めて注目が集まった。

「明治百年」については近年、知識人を対象とした思想研究を中心に複数の研究⁽¹⁾がなされてきた。その中でも宮本司の論文は、戦後知識人らの「明治百年祭」をめぐる言説、政府による「明治百年祭」とその準備過程での思想内容、「明治百年祭」の是非をめぐる展開された歴史学の大規模な反対運動とそこで提起された視点や問題点、の三つの要素について丁寧に検討し、三者の思想的な関係性を明らかにしている。ただ、「明治百年祭」のアクターを戦後知識人、政府、歴史学者に設定して論を進めている点で、思想面から見た「明治百年」研究の域を出ていない。

本稿では、政府による「明治百年祭」及び「明治百年」という時空間を、新聞を主な一次資料として用い、これまでの研究とは別の視点から分析することによって、地方や大衆社会における「明治百年」が如何なるものであったのかを明らかにすることを目的とする。国家による上からのイベントである「明治百年祭」を、周辺や下から捉え直すことで、これまでとは異なる新しい「明治百年」像を提示し得るだろう。

1. 知識人と政府の「明治百年」

戦後日本の歴史学の主流は、マルクス主義による唯物史観によって近代日本の歪みと問題を解明しようとするものであった。そこでは、「明治」は封建的な天皇絶対主義を生み出した「日本帝国主義」の基礎形成期⁽²⁾であるとされ、それを肯定的に評価することはタブーであった。これに対し、フランス文学者の桑原武夫は、1956年、明治の革命を一つの偉大な民族的達成であったと認め、明治の人々の示した強固な独立への意志と大胆な近代化への意欲を再評価すべきだ、という趣旨の論文を『朝日新聞』に掲載し、「明治」の再評価を最初に論壇に迫った⁽³⁾。しかし当時はこの提案が学界であまり大きく取り上げられることはなかった。1960年になると、中国文学者の竹内好が、「ナショナルな観点」を尊重する立場から、「明治維新百年祭を「黄金の60年代」の一大行事にしたい」と具体的な提案をした⁽⁴⁾。明治維新を完了したものではなく、現在進行形であるべきものとする竹内の維

新観は、桑原とは異なるものであったが、両者とも「戦後歴史学」あるいは講座派的な歴史叙述を相対化しようという点では共通していた。

その後、当時駐日アメリカ合衆国大使であったライシャワーの『日本近代の歴史的評価』やその他いわゆる近代化論が契機となり、「明治百年論」は60年代論壇のテーマとして定着していく。一方、知識人らによる「明治再評価」の構想を受けて、戦後20年余り目立たなかった右翼や宗教団体が明治維新再評価を現代の“昭和維新”の起点にしようと活発に動き出し、吉田松陰、佐久間象山などの没後年数を顕彰したり、明治維新の歴史的意義をPRしたりする団体が次々と現れた⁶⁾。また、1965年頃からはデパートなどで「明治天皇聖徳記念展」が開かれたり、新聞上に「明治百年」という表現が出始めたりすることによって、徐々に社会の中で「明治百年」ムードが醸成され、当時の新聞が「明治百年論」の洪水「かつてない明治ブーム」と評する社会状況が用意されたのである⁶⁾。

こうした社会の動きを受け、政府も「明治百年記念準備会議」を設置し、総予算14億という巨額を投じて明治百年記念事業を当時戦後最大と言われる国家行事に作り上げた。その集大成とも言えるイベントが、1968年10月23日、日本武道館にて挙行された「明治百年記念式典」であった。宮本は、このようにして「明治百年」を大々的に祝った政府の思想は極めてパラドキシカルなものであったと指摘する⁷⁾。それは「明治百年」を祝う根本的な動機を、戦後の経済復興と当時の高度成長という輝かしい現実そのものに置きながらも、その近代化＝西洋化がもたらした人間精神や自然の荒廃、つまり近代化の行き詰まりを打開するものとして「東洋的」「日本的」なものを再発見するというものであった。

このような政府の百年行事に対し、政府が歴史に対する特定の評価を支持し、宣伝することは認められない、との立場から、最も強い反対運動を行ったのは遠山茂樹らを中心とする歴史学者たちであった。歴史学研究会を中心に始まった反対運動は、1967年頃から本格化し、多くの学会誌が「明治百年祭」批判特集を公表したり、独自の反対声明を作成したりした⁸⁾。各地方では県教組や高教組、県の歴史教育者協議会などが中心となって各種の反対集会が開かれた⁹⁾。反対運動がここまで盛り上がりを見せたのは、「明治百年祭」が「「紀元節」復活、靖国神社国営化、教科書検定訴訟、学習指導要領の改悪などの問題と一連の関連を有するものとして把握」¹⁰⁾され、また1970年の安保闘争の前哨戦と位置付けられたからである¹¹⁾。

『「明治百年祭」反対運動に関するよびかけ』は、太平洋戦争前夜の1940年に紀元2600年祭が行われ、国民精神をファシズムと侵略戦争に動員する役割を果たしたことを指摘し、「明治百年祭」も同様の危険性があると主張する。そして、その理由として、①「「明治百年祭」の思想の中心にあるのは、この百年間を「壮大なる進歩と発展」の実績をあげた時期としてみる一方、(中略)過去の侵略戦争に対する反省をまったく欠くものであって、戦後の民主的変革の意義や、日本国憲法の精神を否定する反動的歴史観」であること、②政府の準備委員会では「かつて天皇主義を鼓吹した国体論者が主導的な役割を果たして」お

り、「紀元節復活」とともに「天皇中心主義思想を大々的に国民に植えつけようとするもの」であること、③政府の思想は「アジア諸国民の犠牲の上に築かれた日本近代の歩みを、「近代化」の模範として美化しようとするもの」であることを指摘している⁽¹²⁾。

以上のような企図を持つ「明治百年祭」に対し、戦後民主主義と日本国憲法を擁護するために反対しようというのが、反対運動を展開する歴史学者の立場であった。明治維新の現代的意義、明治以来百年の歴史をどのように評価するかというのは、過去の史実の評価の問題であると同時に、現代日本、現代世界をどう考えるかという現代政治の問題であるから、それに対して政府が意義付けを行ってしまうのは、国民の政治、思想の自由を侵すことに他ならない、と戦後歴史学を代表する遠山は述べている⁽¹³⁾。そして彼らをここまで思い至らしめたのが、「学問の社会的責任」という意識である⁽¹⁴⁾。すなわち、「戦前では、研究者が研究結果の政治的に悪用されるのを阻止することができず、その結果研究の自由が侵され、研究者が権力に従属するといった事態が生れた」⁽¹⁵⁾ことへの反省から戦後歴史学では、研究の自由と、学問が社会的に「悪用」されないように努めることが強く意識されてきたのである。

2. 大衆社会における「明治百年」の実態

1968年にいわば上からの「明治百年祭」が行われる運びとなったわけであるが、必ずしも政府が描く一つの「明治百年」像だけが存在していたわけではない。明治の開国以来激動の百年を経験してきたがゆえに、この時代の日本には空間的にも世代間にも大きな意識格差が存在していた。それ故、国家が一つの歴史像を提示し、それを国民が共有することは、あまりに困難なことであった。

2.1. 地方における「明治百年」

2.1.1. 地方公共団体における記念事業

「明治百年祭」を全国的規模で行うことを決定した政府は、1967年11月に各都道府県に、記念祝典の他、国の趣旨に沿った行事・事業を実施するよう要請している⁽¹⁶⁾。これまでの先行研究では、「明治百年」は政府と歴史家の歴史論争を中心に語られてきたため、「明治百年祭」も歴史事業としてのイメージが強かったが、実際には「明治百年」の看板のもとに幅広い事業が行われた。政府の記録⁽¹⁷⁾をもとに記念事業を、①博物館など公共施設の建設、森林公園や「県民の森」の整備等のハード面の事業、②県史編纂等の歴史関係、③県章、県歌の制定などその他、に分類すると⁽¹⁸⁾、府・県史の編纂、県出身先覚者の伝記刊行といった②の歴史関係事業よりも、①の「明治百年記念公園」「県民の森」「こどもの国」の造設などハード面の事業を明治百年記念事業の中心に据えている自治体が多いことが分かる。ほとんどの県で何らかの緑化事業が行われており、ほぼ国土緑化運動といっても過

言ではないほどである。この背景には、当時進められていた国土総合開発計画による地域開発によって、都市の過密、公害問題や農村での過疎問題が各地で顕在化してきていたという事情があった⁽¹⁹⁾。地方では1960年代はじめ、高度経済成長政策下での農業の構造改革事業やアメリカの余剰生産物受け入れによって、農業経営が打撃を受けるとともに、地域開発計画で大規模工場を誘致したことによって、所得格差や過疎過密といった問題が生じていた他、公害も深刻さを増していた。歴史学者の松本四郎は、このように、1960年代後半、経済優先の広域経済開発進行の中で住民との矛盾が顕在化していた自治体では、経済開発一本槍ではなく「人間尊重」を重要な県政のスローガンとして掲げざるを得なくなり、そうした状況下で、明治百年記念事業を住民福祉事業として利用しようとする動きが見られた、と述べている。例えば、三重県の「青少年の森」には、初年度工事費として8000万円が計上されているが、これは四日市ぜんそくの公害対策費の倍以上の規模であり、松本は「暮らしの場、生産の場で改めるべきものには手を付けず、自然との交わりにより心の安らぎをえる為の場所を別個に設けていこうとする施設、設備が「明治百年祭」を機に一斉に出てきた」と指摘している⁽²⁰⁾。さらに、「明治百年」をどうしても祝いたい政府が、国有林を提供することなどを条件に各都道府県に記念事業として「府民の森」や「県民の森」をつくるようにすすめたのがきっかけであり、「県民の森」の構想が生まれ、用地確保などが進んだ⁽²¹⁾という『中国新聞』の紙面からは、是が非でも全国的規模で記念事業を実施したい政府が、国民からも自治体からも反対されにくい緑化事業などを積極的に押し進めていったことが窺われる。

2.1.2. 地方における歴史事業について

明治以降の歴史を国家レベルではなく地域レベルで語ろうとする際、それは当然ながら国家としての百年の歴史とは異なるストーリーになる場合がある。例えば、遠山は座談会の中で、

学校の先生の集会で明治百年の話が出たら、山口県の先生が『松陰から栄作まで』というキャッチフレーズを県のほうから出してきているという話が出た。そうしたら今度は東北の先生が、うちのほうでは戊辰戦争再評価論というのが出ている。東北というのがなぜ後進地帯になったか、明治維新で薩長にやられて、薩長からいじめられたために後進地帯になったということを、この機会にはっきりさせることによって、東北人の劣等感をなくすというふうなことをいうわけです

と語っている⁽²²⁾。

また、新聞での取り上げ方も、例えば京浜工業地域として発達した千葉県や北九州工業地域として発達した福岡県などの1968年10月23日付（東京で記念式典が行われた日）の新

聞では、明治以降の百年で自県がいかに大きく変化したかを強調する「明治百年特集」が見られる⁽²³⁾。『千葉日報』では、農水産県として東京の台所に甘んじていた千葉県が、戦後工業県へと飛躍的な発展を遂げたことを、一面で大々的に報じている⁽²⁴⁾。一方、『佐賀新聞』では、かつて佐賀藩が戊辰戦争において会津の落城に大きく貢献したにもかかわらず、後進県として取り残されている現状を県民の責任であると強く反省し、記念祝典にあたって表彰などをいっさい行わない方針をとったことを報じている⁽²⁵⁾。

このように、同じ「明治百年」という看板の下でも、地域ごとにそこから想起される記憶は異なり、各地で異なったストーリーが展開された。また、各県には巨大な経済格差が存在していたことは、新聞にしばしば登場する「先進県」「後進県」という言葉からも読み取ることができる。明治以降百年の歩みは、ある地域では華々しい近代化の歴史である一方、ある地域では発展から取り残されたことへの反省の歴史だったのである。

歴史事業が具体的に各地域で行われる際に、地元の歴史をめぐる対立が起こる場合もあった。例えば、広島市は記念事業の一つに広島大本營の復元計画があった。旧軍人グループや財界の中には「大本營復元で広島の精神的戦後処理が始まる」と強い賛成があったが、労働組合、被爆者団体、婦人、学生らは、「原爆都市ヒロシマのイメージがこわれる」「軍国主義につながる危険な復古主義」として市民組織を結成し反対に乗り出した。「日清、日露の戦争は防衛戦争だった」と市長が発言して歴史論争にまで広がり、ついに反対の世論に押されて計画は立ち消え状態になってしまった⁽²⁶⁾。また、1968年に山本茂実によって、明治時代から大正時代にかけて岐阜の貧しい農家から長野の製糸工場に働きに出た女工たちの姿を描いた『あゝ野麦峠』が発表され、長野県では野麦峠に記念碑を建てる計画があったが、その計画をめぐる「いまさら、歴史の恥部をさらす必要はない」という意見が出るなど地元で賛否両論をよんだ⁽²⁷⁾。百年間を近代化成功の歴史として描こうと政府が意図した歴史事業は、具体的に地域で企図される際、住民の様々な歴史体験と結びつき、戦争や貧困など地方の負の経験をどのように捉えるのか、住民間での意見の相違を顕在化させる場合もあった。

以上のように、地方において歴史事業を行うということは、各地域が「明治百年」に対してもつ歴史と記憶の差から、異なったストーリーを展開していく点、さらにある地域の歴史をめぐる一枚岩ではない住民の意識差が露呈する場にもなるという点において、政府の統制のきかない難しさを孕んでいた。

2.1.3. 式典当日における地方のバラバラな対応

1968年10月23日東京、日本武道館で天皇、皇后も参列する「明治百年記念式典」が開かれ、約1万人が参加した。地方ではこの日政府に呼応して、12県で記念祝典が開かれたが、式典は「明治百年というものが内容的に十分国民に理解されていないため、空疎な印

象を与えたことも否定出来ない⁽²⁸⁾と言われるように、式典自体への関心と盛り上がりは政府が期待したものにはならなかったようだ。

学校に関していえば「文部省も「式典を祝って学校に日の丸をかかげ、授業は半ドンにしてもよい」と全国に通達したが、日教組などの反発が強く、半ドンの足並みはそろっていない」と報道されている⁽²⁹⁾。

一般の関心については、「何のおめでたいことがあったのか」と首をかしげる人が多く、式典は一般まであまり浸透しなかったようす⁽³⁰⁾、「ビル街でも国旗を掲げ、“慶祝”を表わす所が多かったが、ほとんどの会社は平日どおり」で「無関心派のサラリーマンなどが多く、国旗を見て「なんの日？」と首をかしげている⁽³¹⁾」というように、この日を全国規模で祝うという政府の目論見通りとはいかなかったようである。

また、兵庫県と神戸市は、ともに前年1967年に「農政百年」「開港百年」の式典を済ませていたため、この日には公的な行事を一切行わなかった。京都府に至っては、独自に「京都府百年祭」を実施した。1968年6月に京都府開庁百年記念式典を済ませていた京都府は、すべての行事や事業に「明治百年」の名称を付けないことで自治体としての独自性を堅持しようとした。名称については表1において太字で示した通り、革新自治体の京都府や東京都の他、北海道、兵庫県、山口県が、「明治百年」という言葉を用いず独自の名称を用いていた。ここには、「明治百年」という言葉を用いることによって明治に対する懐古趣味や明治の美化が出てくるのを避け、自治体が発展、成長してきた事実そのものに注目したい、国と異なる意味付けを持たせたい、という自治体の思いが現れている⁽³²⁾。

表1 地方公共団体の行う行事等

都道府県	名称	記念式典	記念行事	記念事業① (建設・緑化)	記念事業② (歴史関係)	記念事業③ (その他)
北海道	北海道百年	○	北海道百年記念 スポーツ祭典 北海道百年記念 博覧会	北海道百年記念公 園 北海道開拓記念館 北海道百年記念塔 記念植樹	新北海道史の編集 北海道開発復興功 労者伝記の編集刊 行、声の録音 北海道回顧録の編 集刊行 北海道百年の歩み の編集刊行 北海道開拓記念物 調査 赤レンガ(庁舎) の保存	旗、章、道歌の制定
青森	青森県明治 百年	×		県民の森	郷土館の建設	
岩手	岩手県明治 百年	×		県民の森 記念植林		

梨本柴乃 明治百年——大衆社会における多様な歴史観とつくられる歴史像——

宮城	宮城県明治百年	○	明治百年記念芸術祭新劇公演 医学研究に関する郷土の先賢の顕彰と赤痢追放県民大会	県民休暇村 県民の森 障害者施設（「愛の手をつなぐ運動」） 明治百年記念県土緑化	公衆衛生に関係のある史跡文献等の収集調査保存 郷土史映画製作 志賀潔博士の銅像建設	時計塔の建設 明治百年記念文庫設置補助
秋田	秋田県明治百年	×	青少年の祭典 秋田農業博覧会	県民の森 体育館 博物館 青年会館	「秋田の先覚」の顕彰、偉人伝記の出版	秋田県吹奏楽曲の作成
山形	山形県明治百年	×	明治百年記念県勢発展資料展	青少年育成施設 博物館 記念植林		
福島	福島県明治百年	○	福島の百年を築いた先賢たちの顕彰	県民の森 文化センター 県民の広場 総合体育センター こどもの遊び場 学校記念植樹	記念映画の製作 歴史史料館	県章の制定
新潟	新潟県明治百年	×	高齢者表彰	造林		
茨城	茨城県明治百年	×	県政百年写真展 横山大観、板谷波山展の開催 農業祭 先賢偉業顕彰 献木緑化推進運動	リハビリテーションセンター 心身障害者コロニー 海の子供の国 青少年健全育成ゾーン 子供の遊び場 県民の森 県議会議事堂 記念造林	歴史博物館 孔子の廟の再建 県史編纂	県民の日制定
栃木	栃木県明治百年	○	体育祭 農業祭 文化財展	県民の森 図書館 県民プール 「とちの木」植栽	県史編纂 郷土博物館	
群馬	群馬県明治百年	○	展示会 高齢者の慶祝	県民会館 群馬の森 図書館 記念植樹	記録映画の製作 県史編纂	
千葉	千葉県明治百年	×	老人福祉大会	「こどもの国」 県民の森 森林苑 富津海岸公園 記念植樹・造林	千葉県教育100年史の発刊	青少年文庫

東京	東京百年	○	<p>展覧会（市民生活の変遷，芸術関係）</p> <p>郷土芸能公開</p> <p>都民体育のつどい</p> <p>都民体カテスト</p> <p>バレード</p> <p>施設公開</p> <p>講演会</p> <p>作品公募（論文，作文，祝典曲，記念歌）</p> <p>コンクール（統計関係，写真，図画，漫画）</p>	<p>記念博物館</p> <p>都民ホール</p> <p>都民の広場</p> <p>記念植樹</p>	<p>東京百年史</p> <p>目で見る東京百年（出版）</p> <p>記念映画「東京百年」「東京一千万」</p>	
神奈川	神奈川県明治百年	○		<p>水源林</p> <p>桜公園</p> <p>青少年野外活動センター</p> <p>植樹・苗木の配布</p>		
山梨	山梨県明治百年	○	<p>記念講演</p> <p>高齢者の祝典，地域社会の発展に貢献した篤志家の表彰</p> <p>バレード</p>			
静岡	静岡県明治百年	×		造林	静岡県百年史編纂	旗，章，県歌制定
富山	富山県明治百年	×	<p>古美術展</p> <p>宮中雅楽演奏会</p> <p>青少年芸術劇場</p>	<p>青少年の家</p> <p>県立図書館</p> <p>青少年の山</p> <p>木材試験場</p> <p>造林</p>	県史編纂	社会福祉等の充実
石川	石川県明治百年	×		<p>青少年レクリエーションセンター</p> <p>県立農業短期大学の開設</p> <p>緑化</p>		
岐阜	岐阜県明治百年	○		<p>青少年総合活動センター</p> <p>記念林</p> <p>憩の森</p>		
愛知	愛知県明治百年	×		<p>長久手青少年野外活動センター</p> <p>心身障害者福祉センター</p> <p>県民の森</p> <p>三河パークライン（県開発公社事</p>		

梨本柴乃 明治百年——大衆社会における多様な歴史観とつくられる歴史像——

				業) (自動車道建設)		
三重	三重県明治百年	○		青少年の森 記念植樹・街路植樹		
福井	福井県明治百年	×	明治百年記念展	記念植樹		
滋賀	滋賀県明治百年	×	放魚祭	造林		
京都	京都府開庁百年	○	京都 100 年展	日本の森造成 文化芸術会館 丹波自然運動公園	京都府 100 年史の編纂 文化財図録 文化財映画 郷土資料館	映画「祇園祭り」製作の補助 工芸品等図録の作成
兵庫	兵庫県政百年	○	記念映画と音楽の夕べ 郷土画家名作展 芸術祭 県警本部音楽隊による移動音楽会 六甲山マラソン大会	県民会館 地方文化会館 美術館 こども専門病院 リハビリテーションセンター 記念公園 記念植樹	兵庫県百年史 文化財図鑑 郷土 100 人の先覚者集	記念映画
奈良	奈良県明治百年	○	偉人展 十津川郷展	造林		
和歌山	和歌山県明治百年	×	文化祭 明治百年記念老人福祉大会 (毎年恒例のもの)	青年の森 史跡公園「紀伊風土記の丘」	浜口初代議長の銅像 「郷土史に輝く人々」発刊	
鳥取	鳥取県明治百年	×		県民の森 森林植物園 造林	県史編纂 鳥取藩史稿本	旗, 章, 県歌制定
島根	島根県明治百年	×	明治百年百傑顕彰	県民会館	明治百年百傑顕彰 (伝記, 遺品, 遺跡の調査など)	
岡山	岡山県明治百年	○	記念懸賞論文の募集 体育大会 芸術祭 100 歳以上高齢者の慰労 農業祭 農業改良普及事業 20 周年特別事業 水産業振興功労者の表彰 全国ジャージー牛共進会への参加	博物館 武道館 交通安全センター 記念植樹	「目で見える岡山百年 (写真集)」 岡山県政史	

広島	広島県明治百年	○	100歳以上高齢者の慶祝 農業祭 教育功労者表彰 全国高等学校総合体育大会	広島交通公園 県立美術館 県民の森 自然公園 造林	県史の編纂	県章、県歌の制定 明治百年記念映画
山口	山口県維新百年	×	記念講演 維新百年記念全国展	県立博物館の改築 青年の施設 少年消防クラブ会館 商工指導センター 農業試験場の整備 明治百年記念森林公園 学校造林, 愛鳥林	県政史 維新百年史	県立教育財団の設立
徳島	徳島県明治百年	×	農業祭 芸術祭 名作画展	県民の森 郷土文化会館 教育センター 記念植樹	県史編纂	
香川	香川県明治百年	○	明治百年記念展 記念講演会	県民いこいの森 青年センター 青少年広場 科学施設 河川敷円座公園		青少年文庫 青少年基金 「香川のすがた」編纂
愛媛	愛媛県明治百年	○	先覚者の顕彰 高齢者の慶祝 記念講演会	美術博物館 こどもの広場 植樹		海外移住子弟の国内 留学受入制度
高知	高知県明治百年	○	記念講演会 土佐維新展 維新史跡の巡拝 維新志士墓域の清掃整備 観光物産展 体育大会 土佐青年のつどい	郷土文化会館(明治百年記念館) 文化センター 青年の家 教育の森 県民の森 総合運動場	県史の編纂 史跡案内板設置 開成館の復元 郷土史読本の発刊	記念映画 姉妹都市提携
福岡	福岡県明治百年	○	総合農業記念祭 バレー特別公演 福岡県の文明開化展	県民の森 北九州記念緑地		
佐賀	佐賀県明治百年	○	明治百年記念展 明治百年記念作文募集 あすを築く青少年大会 九州民族芸能大会	博物館 森林公園 植樹 明治百年記念林	「日本を築いた郷土の人々」発刊	
長崎	長崎県明治百年	○	先覚者と長寿者の顕彰	長崎県国際ビル	長崎県漁業史	まち・むらの編集

			勤労者の顕彰 公衆衛生大会 「長崎県の貿易 と物産展」 農業祭 文化講演会 国民健康保険記 念大会 長崎美術百年記 念展	ながさき村の建設 県民の森 南山手公園 明治百年記念動物 園 長崎港, 大波止～ 水之浦架橋建設 青少年の天地 緑化, 植樹	長崎県人物伝 観光資源としての 明治の文化財調査 史料館	国際親善クラブ
熊本	熊本県明治 百年	○	記念講演 近代文化功労者 顕彰 農林漁業祭	造林	熊本県先哲伝記 熊本県文化資料の 調査	
大分	大分県明治 百年	×		久住・飯田高原地 域の大規模農業開 発 青年の森 植樹	県政百年史の編纂	
宮崎	宮崎県明治 百年	○	青少年営火のつ どい 記念論文募集 記念ポスター図 案募集 記念講演 緑化書道展	総合博物館 記念の森 植樹		
鹿児島	鹿児島県明 治百年	○	作品募集と移動 展 記念講演会	記念会館 青少年のための研 修センター 明治百年記念南洲 公園	「鹿児島と明治維 新」刊行 「鹿児島県維新史 料」刊行	

注：総理府大臣官房『明治百年記念行事等記録』（未刊行，1969年，国会図書館所蔵）より筆者作成。

このように1968年10月23日の各地方の報道を見れば、少なくとも政府による官製の「明治百年」は大衆に浸透し受容されていたとは言い難く、各地バラバラな対応が目立った。前述したような、政府が「明治百年祭」を企図する前から起こっていた明治ブームや歴史論争によって、「明治百年」自体への認知度や関心は高まっていたが、その波に政府が便乗する形で行われた「明治百年記念式典」への関心は冷めたものになっていたといえる。その背景の一つとして、歴史事業を全国規模で行うことの難しさと、当時の自治体が高度経済成長の歪みの顕在化という問題を抱えていたことが相まって、官製「明治百年」は歴史イベントというよりむしろ建設事業や緑化事業などハード面が中心になったこともあると考えられる。

2.2 地方紙社説に見る「明治百年」への意識

宮本は、内閣総理大臣官房広報室が1968年に行った「明治百年記念に関する世論調査」アンケートで、実に92%の国民が「今年が明治百年記念の年であること」を知っているという結果を根拠に、「明治百年祭」は「高度経済」により生み出された“大衆社会”によって、広く受容され、「戦後の高度経済成長を根拠に、大衆社会が「明治」、ひいては近代日本の歩みそのものを“サクセス・ストーリー”として消費対象とするようになっており、それゆえ政府による「明治百年祭」も広く大衆社会に受容された⁽³³⁾と論じている。ここには、高度経済成長という現実を根拠に「明治百年」を祝う政府および大衆社会と、それに抵抗する歴史学者、という明白な二項対立を前提とした理解が存在する。しかし、こうした構図のもとに「明治百年」を語ることは、いささか短絡的だ。そもそも、第1節でも論じた通り、「明治百年」ブームは政府が「明治百年祭」を企図する以前から既に民間や学界において盛り上がっていたことから、多くの人々が「今年が明治百年記念の年であること」を知っているというだけで、政府の「明治百年祭」が大衆に受容されたとは言い難い。前項で論じた通り、政府の「明治百年祭」に対する地方の対応はバラバラであり、一般大衆の関心も薄かったと言わざるを得ない。

それでは、大衆社会における「明治百年」とは、どのような時空間だったのであろうか。

鈴木洋仁は、桑原が明治の再評価を提案する文章をしたためた1955年について、「のちに「55年体制」と呼ばれる保守と革新それぞれの合同がなされ、12月には「経済自主独立5か年計画」が打ち出され、翌年にはソ連との国交回復が盛んに報道されるなど、敗戦直後を意味する概念としての「戦後」から、人々は新しい時代の息吹を感じとりつつあった」とし、実体経済の側面からも「神武景気」に沸く日本の経済状況を背景に、「敗戦」の衝撃に打ちひしがれ日本の歴史に自信を持てなくなっていた人々が、過去に回帰する復古調に傾きはじめたと言えるかもしれない、と指摘している⁽³⁴⁾。たしかに、桑原が「明治の再評価」を初めて提案した1950年代半ばの日本社会の空気は、そのように好景気を根拠とした楽観的なものであったのかもしれない。しかし、その後10年経った1968年の空気は、それとは異なるものになっていたのではないか。

大衆社会における「明治百年」という時代の空気と、大衆が「明治百年」をどのように捉えていたのかを明らかにするため、東京において明治百年記念式典が行われた1968年10月23日と翌日24日付の各地方紙の「明治百年」への言及を、社説や編集者によるコラムを主軸として分析した。「明治百年」に関して、ジャーナリスティックな文章を対象とした研究は鈴木も行っているが、それは桑原武夫と竹内好の書いた文章に焦点をあてたものであって、大衆を取り巻く時代の空気の分析とはいえない。なお、「明治百年」に関する記事は当然上記の2日以外にもあると考えられるが、今回は対象紙が多いため、この2日間に限った。

2.2.1 「明治百年」という時代の空気

1968年という年は、世界でも日本でも様々な社会の変化が起こった年として語られることがある。世界ではプラハの春がソ連の戦車によって蹂躪され、フランスの5月革命以降各国で若者の反乱が起き、アメリカによる北爆が横行するベトナム戦争を背景に反戦運動も広がった。日本でも「東大闘争」や「日大全共闘」の大衆団交というような学生運動が盛り上がり、10月21日の国際反戦デーでは1万5千人以上の学生が新宿駅を占拠する「新宿騒乱」も起こった。霞ヶ関ビルが建てられ、東名高速道路が建設され、郵便番号が導入され、ポケベルの利用が始まり、自動券売機が駅に導入されたのも、メキシコシティ・オリンピックでの日本人選手の活躍に沸き、GNPが世界第2位になったのもこの年である。要するに、1968年という年の日本社会の空気を一言で語るのは非常に困難なことである。ただ、「明治百年」という過去を振り返るイベントに関する社説や論説を通して、社会の共通した心性のようなものを掬い取ろうとすると、多くに共通して「今まさに近代と現代という時代の境目にいるのだ」という感覚を発見することができる。「時代はいま、われわれの目の前で、歴史的な意味における“近代”から“現代”へとゴウゴウ音を立てて移り変わりつつある」⁽³⁵⁾、「現在はまさに激動する変革期が、世界的に訪れつつある気配を、われわれを取り巻く空気の中から感じとらせている」⁽³⁶⁾といった表現が端的にその感覚を表している。この感覚の背景には、上記のような、人々の身の回りで起きている社会の変化や、報道を通して目にする衝撃的な世界のニュースに加えて、明治から百年の節目の年であるという意識もあるかもしれない。そして、当時の人々が抱いていた「時代の境にいる」という意識に、筆者は社会の3つの不安を読み取った。

1つ目は、敗戦後の焼野原から20年程でGNP世界第2位にまで上り詰め、アメリカの未来学者ハーマン・カーンからも「21世紀は日本の世紀だ」と言われるなど、もはや追従すべき先進国をもため位置まで押し出されて、この先どこに進むべきかを自ら考えなくてはならない所まで来てしまったという不安である。

明治の日本には、お手本があった。欧米の先進国を見習い、追いつき追い越す努力をすればよかった。しかし明治百年の日本は、曲がりなりにも先進国の仲間入りをしている。欧米に見習わなければならないことは、少なくなった。これからは、自分で考え自分で解決しなければならない立ち場にある⁽³⁷⁾。

そして、未来に対する明確なビジョンを持たず、「自らの考えで前進する」のが不安だからこそ、「明治百年をふりかえり」「この百年を越えて、さらにみずからの考えで前進するにあたり、その決断に役立つ何かを過去の中から探り出そう」という意向が、はたらいっているのであろう⁽³⁸⁾というように、「明治百年」に、未来を模索する契機という意義が見出されるのである。

2 つ目は、工業化によって人間疎外が進んでいることへの不安である。当時世界中のステューデント・パワーなど新左翼に広く読まれていたアメリカの哲学者マルクーゼは、工業化社会とそれに伴う管理技術の発達による体制の中で人間疎外が深化する、と主張した。同じくアメリカの社会学者リースマンは、現代人の人格をいくつかに分類し、「少数の有閑階級と広範なレジャー大衆とが、衣食住以外のことがらに関心を抱く余裕を与えられるような社会」になると、現代社会に適応するために、自ら考えたり、価値判断したりすることをやめ、第三者が作り出す思考や判断を、そのまま敏感に受け入れていく「他人指向型」の人格が登場する、と指摘している。奢侈安逸の時代と言われた日本も例外ではなく、こうした社会に当てはまると考えられた⁽³⁹⁾。また、67年に総理府が行った世論調査⁽⁴⁰⁾では、過去百年の歩みを振り返って誇りに思うものとして、第一に産業・文化の発展があげられていたものの、その発展の先にある「未来はほんとうに明るいのか。技術革新による工業社会は人間に幸福をもたらすだろうか」⁽⁴¹⁾という不安が、社会の中、特に若者の間に共有されていた。この時代に「人間復興」や「人間ルネサンス」という言葉が使われるようになったのも、こうした感情の裏返しといえる。

さらに、世界での科学技術の驚くべき発達は、当時の日本社会に3つ目の不安をもたらした。奇しくも1968年10月23日付の多くの新聞の一面を、象徴的な2つのニュースが飾った。1つはアメリカのアポロ7号が無事回収されたというニュースである。1969年に初めて成功する人類の月面着陸へ大手をかけたこのニュースは日本でも大きく報じられた。もう1つは佐世保事件⁽⁴²⁾に最終決着をつける、米原子力軍艦の日本寄港に伴う放射能問題についての覚書に、日米が署名したというニュースである。佐世保事件は、平時にもかかわらず米軍艦によって日本の海が汚染されていたという意味で反発を呼んだ。他にも、1966年に国内初の原子力の商業利用が始まり、1967年には世界初の心臓移植手術が成功するなど、科学の進歩を裏付ける様々なニュースが人々に衝撃を与えた。「現代は既成の観念が打ち破られつつある時代」であり、こうした科学技術の進歩は「新しい人類のあり方を約束している」⁽⁴³⁾という希望をもたらすと同時に、科学が脅威となることへの不安ももたらした。『河北日報』の社説には次のようにある。

宇宙の神秘に挑戦する科学の発達には目をみはるものがあるが、その半面 [ママ] すなおに喜ぶ感情があることも否定できない。それは原子爆弾に始まった米ソの軍事力の競争がその成功の裏に露骨に感じられるからであり、日を同じうして日米両国間に確認された米原子力艦の安全性に不安を持つ日本国民にとってはなおさらのことである。(中略) われわれは一方ではアポロ7号の宇宙計画に目をみはりながらも他方では原子力放射能の安全性を確かめることのできぬ谷間に置かれている⁽⁴⁴⁾。

科学技術の発達によって人類が宇宙に近づくことは、同時に米ソの宇宙開発競争の進展を意味している。いくら経済的に発展したとはいえ、冷戦という大きな構造の下ではなす術のない非力な日本の、現状に対する不安を読み取ることができる。

以上のように、「明治百年」という枠越しに1968年という時代の空気を観察した時、時代が転換期に差し掛かり未来への道筋が見えないこと、工業化により人間疎外が深化していること、そして冷戦体制という自らにはどうすることもできない大きな国際関係の下に置かれていたことによる社会の不安が見えてきた。そしてそのような時代閉塞の雰囲気、不安定な状態こそが、過去を見返す「明治百年」というイベントに意義を与えたのである。

2.2.2 大衆社会における「明治百年」の受け止め方

では、このような時代の空気の中で、大衆社会は「明治百年」をどのように受け止めていたのだろうか。それは、人々が「明治」という時代をどう見ていたかということに関わる。ただここで留意しなければならないのが、「明治」という語感が与える印象はその人の体験と年代によって大きく異なる。ある人は古き良き時代を思い出し、ある人は日清、日露戦争に始まる日本の戦争時代を考える⁽⁴⁵⁾といわれるように、一口に大衆社会といっても、世代によって「明治」の受け止め方が全く異なるということである。当時の新聞に「明治人」「大正っ子」「昭和っ子」「現代っ子」といった言葉が登場することにも、元号によって区切られた世代間の違いへの意識が垣間見える。

例えば、明治年間は、「富国強兵主義への犠牲を強制された時代であった。その苦しさを体験した明治人はまだたくさん生きている」⁽⁴⁶⁾という言葉や「明治のモットー富国強兵も裏を返せば過酷な小作制度と低賃金労働力にささえられて近代化が進められた。本県の五十歳以上の農民ならば明治、大正、昭和戦前の小作農民の実態は痛いほど知っていることだろう」⁽⁴⁷⁾という言葉の中には「明治」に対するネガティブな感情が読み取れる。

一方、とりわけ「明治」に対してポジティブなイメージを形成していたのが、前述したような社会不安に晒された若者であった。明治を再評価する時代風潮の中で、若者も現状への不満と対比させる形で「明治」を理想化していく傾向があった。現状への不安意識は、この百年間に「医学も科学も工業も農業も文化も、当時から想像できないほど進歩しているのに、どうしてかぼくは「これでいいのかなあ」という気持ちが起きるのだ」⁽⁴⁸⁾という小学生の言葉からすらも窺うことができる。彼はその理由を、自由と身分の区別をなくすという明治の人たちの理想があったにもかかわらず、現実には、身なりの悪い人が良い考えをのべても世の中に受け入れられない現状で、科学にくらべ心の問題が進歩していないからだとしている。当時の中学生も次のように述べている。

たしかに、日本は戦後物質的にはめざましい復興を遂げました。しかし、精神的にはどうでしょうか。現在の私たち日本人は、真に祖国を愛する心に燃えているのでし

ようか。個人の自由と権利を振りかざして、いたずらにマイホーム的な考えにはしている点が、ありはしないでしょうか⁽⁴⁹⁾。

物質的な豊かさとは裏腹に、マイホーム主義⁽⁵⁰⁾に走る当時の私生活志向の風潮と対比する形で、明治の人々の愛国精神が理想化されている。さらに、高校生ともなると、文部省の白書で「現在の高校生は夢を持っていない」と言われていることを、親たちのマイホーム主義の波が子供たちの豊富な夢の芽を摘み取ろうとしているからであると訴え、親世代の私生活主義を厳しく批判した。

明治の人たちは、将来に対する大きな夢を持っていた。だからこそ、工業、思想、その他あらゆる面において欧米諸国に遅れていた日本が、百年の間に、世界をしのぐほどの水準にまで追いあげてきたのではないのでしょうか。しかし、いまの若い世代には、夢がないのです。マイホーム主義、いまの生活に満足し、安寧としているのです⁽⁵¹⁾。

若者たちは、目標を求めて彷徨う当時の日本と、「夢や理想がない」と言われ、情熱を傾けるべき大きな目標も見つからないが、自分だけの小さな幸せに甘んじるマイホーム主義にも満足できない自らとを重ね合わせていた。だからこそ、「開国進取」や「富国強兵」といった国家も青年も共有することのできる明確な使命・目標があり、国家のために奉仕した「明治」の人々に憧れを抱いたのである。では、そもそもこのような「明治」の人々のイメージを、若者に提供したものは何であったのか。これについては次節で論ずることにする。

以上のように、「明治百年」に関する新聞社説や若者の作文から見てくる大衆社会の「明治百年」に対する認識は、「明治」と「現代」という時代に対する考え方や印象の感覚的なズレによって様々な存在する。富国強兵時代の庶民の苦しみを知る世代、戦争の中で青春を過ごし戦後民主主義と平和を築いてきた世代、生まれた時から平和を享受しており、近代化による社会の歪みへの違和感や将来への不安が大きい世代など、世代の違いが百年の捉え方の違いにも影響している。

ただ一方で、注意しなければならないのが、同じ若者でも、もう一度戦前の日本を復活されてはたまらん、と反対運動をするものもあれば、明治に憧れを抱くものもいる。明治生まれの人々でも、戦前日本の輝かしさを思い返せ、いまの日本人は精神的になつとらん、明治はめでたき御代であった、と過去を称揚する者もいれば、富国強兵の下に労働を強いられた時代⁽⁵²⁾としてネガティブに捉えるものもいたりする。とうてい単純な世代間対立とも言えないことである。このように、様々な歴史像が混沌として、政府・大衆社会と歴史学者という二項対立だけでなく、中央対地方や、世代間対立といった分かりやすい対立構造でも語れない複雑さがあったからこそ、議論の契機としての「明治百年」は広く受容さ

れたのに対し、そこに一つの答え、即ち歴史像を提示してしまった政府の「明治百年祭」は盛り上がりに欠けたのではないだろうか。

3. 「歴史ブーム」と歴史学の反省

1960年代の「明治ブーム」というのは、知識人による明治再評価の提案以降徐々に民間において広まり、1966年に政府が全国規模で記念事業を展開すると決めて以降1968年に向けて一気に加速したもので、いわば「記念」と商魂が手を結んでつくられたものである⁽⁵³⁾。例えば書籍は1967年から68年にかけて、歴史、文学、伝記の各部門にわたって「明治もの」が一千点近く刊行され、明治関連の古書も急激に値上がりした⁽⁵⁴⁾。それまでほとんど買い手がつかなかった明治初期の錦絵も、かなりの高値で売られるようになったという。森鷗外や夏目漱石の邸宅、聖ヨハネ教会堂など明治の由緒ある文化財が並ぶ愛知県犬山市の明治村では、村が誕生した1965年3月頃には月平均6-7万人の見物客だったが、1968年8月末までに100万人を超した。桂小五郎、高杉晋作ら維新の志士を輩出した「松下村塾」にも、例年の2倍近い100万人の観光客が押し寄せするなど、明治ゆかりの観光地が賑わいを見せた。終戦直後には明治どころか戦前のもは「なにもかも全てつまらぬものとして背を向けるような世相」であったのが、明治生まれでない人でも「明治は良かった」などと言うようになったことから、社会の歴史に対する態度の変化が窺える。本節では、こうした「明治ブーム」の中で大衆の「明治」像がどのように形成されていったのかを分析し、またそれに対する歴史学者の態度も検討する。

3.1 溢れる「明治」もの

出版界では1959年に読売新聞社から出された『日本の歴史』シリーズをきっかけに、戦後10年ほど経ったころから歴史ものが盛んに出版されるようになった。特に60年代後半には、明治維新以来百年にわたる日本の歩みを改めて検討しようとするもの、明治という時代を再評価しようとするもの、また、それらのために、貴重な資料、史料、文献をまとめておこうとするものまで、明治百年関連書籍が大量に出版された⁽⁵⁵⁾。また、1950年代後半から明治以降の名著や有名雑誌を、初版通りの形で刊行する復刻出版が盛んになった。この背景には、戦争で多くの本が焼かれた反面、大学が各地にできて基礎的な古書が少なくなり、価格も非常に高くなったことがある。さらに、予算の少ない大学では、研究に必要な基礎文献すら容易に揃えられず、毎度図書館で写しを取らなくてはならなかった。また、作者や学者が亡くなった場合に売り出される蔵書も、図書館にそれらをまとめて買う資金がなく、バラバラに古本屋に買われて散逸してしまうという事情もあった。こうして1968年までの約10年間に近代文学、近代思想に関するものを中心に約500点もの復刻版が出版され、各地方の県史、市史も次々に復刻された。このような資料集や復刻版の刊行

によって、散逸していた記録や文書、作品など貴重な資料・史料が大衆のもとに提供されることとなった⁽⁵⁶⁾。

こうした歴史ものの書籍は、人々の暮らしに知的欲求が生まれるまでの余裕がはじめていたこととも相まって爆発的に売れ、それによってさらに多くの歴史関係の本が出版された。座談会「マスコミの変遷」の中で、評論家でジャーナリストの杉村武 [1908-1986] は当時の歴史ブームについて以下のように語っている。

戦後十何年たって、日本経済が高度成長して非常に発展して、旧に倍するようになった。これに応じて個人個人の生活のレベルが上がってきたというような場合に、いままでも文化的、精神的には空疎であった人たちも、なにか自分自身という、日本人自身というんですか、そういうものを見直してみようという気に、おそらくなるだろうと思うんですね⁽⁵⁷⁾。

敗戦後、物質的にゼロの時代を経て徐々に衣食が整ってきたことにより、歴史や文化への知的欲求の生まれる余裕が出てきたころに、読売新聞社の『日本の歴史』といった歴史ものの出版物が出てきて、人々の需要と結びついたのだという。この頃から詩人の全集や日本の詩歌といった出版物が次々出るようになったことから、人々の生活に余裕が生まれてきたことが分かる⁽⁵⁸⁾。60年代後半には読売新聞社の『日本の歴史』に加え中央公論社『日本の歴史』といったシリーズものが、異例の何十万部も発売されるなど大流行した。

ただし、このような明治百年関連書籍は必ずしも政府の明治百年記念にちなんで出版されたわけではない。明治文献の復刻版を中心に発刊する(株)明治文献、藤原正人社長の「明治百年記念には無関係、ことに政府が何を記念しようとする私にはかわりない」という言葉、歴史もの専門の吉川弘文館、吉川圭三社長の「明治百年がさわがれるようになり、ことに政府が音頭をとるようになってからは、何か当社の出版物が、それに関係あるように誤解されることもあるようだが、まったく無関係」、「維新以来の日本のあゆみを、百年でくくって再検討するのは必要だし、ちょうど良い機会と思う。ただ政府の態度は、明治をよき時代としてだけ見る傾向があるようで、われわれのように歴史書にたずさわっている者にとっては賛同できない面も多い⁽⁵⁹⁾」という言葉からは、各社とも「明治百年記念」をそれほど意識していなかったことが分かる。「記念」「祝典」といった姿勢よりも、明治を検討する、近代再評価への手だてといった主旨で出版している場合が多い。

3.2 娯楽の中の「明治」

次に、さらに通俗的な歴史ブームを牽引した、テレビ番組について見てみると、総理府資料⁽⁶⁰⁾の中で「明治百年記念関連もの」として列挙されているだけでも、「アイウエオ」「竜馬がゆく」「ケンチとすみれ」など連続ドラマや単発ものも含め50本近い番組がある。

テレビが家庭における娯楽の中心となっていたこの時代において、大量に放送された歴史もののドラマやドキュメンタリーは、大衆の「明治」や「近代」のイメージにも大きく影響を与えたといえるだろう。

もともと1962年6月から1966年5月まで『産経新聞』に連載された司馬遼太郎作『竜馬がゆく』は、1968年にはNHKの大河ドラマとしても放送され、小説が180万部（1968年10月時点）売れるなど⁽⁶¹⁾、大人気を博した。激動の時代に身をおき薩長連合を成立させ、大政奉還へと時代の流れを導きながら、維新の達成を見届けることなく暗殺された幕末維新の志士、坂本竜馬の一生を描いたこの作品は、「百年間それほど華やかに日の目を見ることの無かった竜馬」⁽⁶²⁾が英雄として人口に膾炙するきっかけとなった。

1966年から67年にかけて放送されたNHK連続テレビ小説「おはなはん」もまた、お茶の間の人気を博した番組のひとつである。陸軍将校の夫と死別したはなが2人の子どもを抱え、さまざまな困難に遭いながらも持ち前の明るさで明治、大正、昭和の時代を生き抜く姿を描いたこの作品は、放送時間の朝8時15分には主婦の台所仕事をする手が止まるため水道使用量が半減したといわれるほどの人気を集め、「朝ドラ」の定着にも寄与した⁽⁶³⁾。「おはなはん」の魅力について、座談会「マスコミの変遷」では以下のように語られている。

林四郎（司会） えがかれているおはなはんというのは、すごく昭和的だと思うんですよ。だけど、わたくしの八十以上になる祖父なんか大変喜んでるところを見ると、やっぱり郷愁……明治的イメージに合っている面もたしかにあるんだろうと思うんですよ。しかし、行動様式というのは決して明治的じゃないんじゃないか。ほんとにこんな人いたのかしらと思う。かえって、ほんとうの明治じゃないものをつくり出して、明治、明治と言っているんじゃないでしょうか。

田所太郎（前略） 夜具のつくりかたが、あれはいかにも今様のつくりかたなんですよ。まくらがおかしいんで。そんなふうなことはそれとして、やっぱりわれわれくらい年配になりますと、あれに一種の郷愁というものを感ずる。いろいろ不備な点はあるけれども、明治のあの時代から大正のはじめごろにかけての時代をもう一回再呼吸する。それからもう一つは、そういうことをぜんぜん知らない戦後の人たちは、不完全ながらあそこで明治というものを学んでいるんじゃないか。それが両方うまくマッチしているんじゃないでしょうか。

ドラマ中に描かれる「明治」は昭和的でリアルさに欠けるが、「明治人」や“大正っ子”はそこにある種のノスタルジーを感じ、「現代っ子」はそこに不完全な明治像を見出した。同じ座談会で、杉村武が「あれは非常に広範な大衆が歴史性を問題にしたり、求めたりしているかという問題だと思うんだ」と述べているように、多くの人が「朝ドラ」に正確

な歴史性を求めていたわけではない。近代の快適さを練りこみつつ、心地よい郷愁を引き出す、つくられた「明治」は、テレビドラマを通して無意識のうちに人々に受容され、浸透していったのだ⁽⁶⁴⁾。

以上のように、大衆社会における「歴史ブーム」の中で人々は、『日本の歴史』のような歴史ものの書籍から意図的に歴史を読む場合と、歴史性を問題としない小説やテレビドラマなどから、意図せず歴史イメージを刷り込まれる場合とがあったが、いずれの場合もそれらの媒体を通して「明治」のイメージを摂取し、歴史像を形成していった。そして散逸しかけていた過去の資料を収集、編纂し、残していこうという動きや発掘事業が「明治百年」に向けて進んだことも、「歴史ブーム」を支えた。

3.3 歴史学の反省

こうした状況を歴史家たちはどのように見ていたのか。歴史学者の松浦玲 [1931-] は、歴史を専攻していない友人に、彼らの最新の歴史像は何によって形成されているのかと尋ねると、ある自然学者は、自分の明治維新像は司馬遼太郎と子母沢寛⁽⁶⁵⁾によって出来上がっている、とはっきり断言したというエピソードを紹介し、以下のように述べている。

司馬や子母沢によって歴史のイメージを作っているのは、おそらく彼が高級インテリだからであって、非インテリの“大衆”ともなると、そのイメージ源は、たぶん、司馬や子母沢の小説でさえもなく、おそらく、テレビの「三姉妹」⁽⁶⁶⁾や「竜馬がゆく」や、「幕末姉妹」「皇女和宮」などであるに違いない。(中略) 国民の大多数の歴史像に影響を与えているのは、おそらく、歴史ブームにあやかっている歴史家の書いたものでさえもないのではあるまいか⁽⁶⁷⁾。

彼は、司馬の作品が売れていることを、変革や革命のイメージが少しでも前進的に捉えられるようになるという面で、相対的にみて喜ばしいことだとしながら、一方で、国民の多くがそうした小説やテレビドラマから知識を得ていることについて、もどかしさを感じている。なぜなら、その中において権謀術数や動乱など歴史的な史実は、あくまで物語の中心テーマである悲恋や動乱を雄々しく生き抜く恋の背景でしかなく、それ故極めて無方向、無責任に描かれるからである。ただ、歴史学者として歴史と文学の境界線を明確に理解しているからこそ、それらを非難して境を踏み倒すことはできないという葛藤があった⁽⁶⁸⁾。

歴史学者は、小説やドラマはもとより、歴史ものとして書かれた書籍が広く読まれることに対しても不安を抱いていた。遠山は、座談会「明治百年」と国民の歴史意識」の中で、一般の読者が読売新聞社の『日本の歴史』や中央公論社の『日本の歴史』をどのように読

んでいるのか、それらから何を得ているのかということが、たえず不安になると述べている⁽⁶⁹⁾。彼は、民衆の歴史や民主主義の発展がおもしろおかしく書いてあるような歴史書を読むことで、人々の歴史意識が荒廃していくのではないかと、危惧していたのである。これに加えて、日本史学者の永原慶二は、大量に売れる本の共通点として、国民的な誇りやナショナリズム的な感情を少しでも満足させるものが多いのではないかと指摘した。その例として、井上清が『日本の歴史』⁽⁷⁰⁾の中で近世初期の海外交渉である南蛮貿易を国民の活力の盛り上がりや海外発展という形で評価していることをあげ、それらを書く歴史家の歴史把握の多様性を認めつつも、歴史ブームの中で、一歴史家が書いたものが国民的レベルで読まれることに対して危険性を感じる、と述べている⁽⁷¹⁾。

権威ある歴史家たちが、一般の国民、とりわけ歴史の本を読むような学生インテリ層についてすら、どこから、どのような歴史像を形成しているのかを把握できず右往左往している様子が、この座談会における歴史家の議論から読み取れる。そして、それは歴史学の在り方そのものに対する反省にもつながっていった。すなわち、それまでの歴史学者は紀元節反対運動や明治百年祭反対運動など政府の反動的なイデオロギーに対抗する学問として前衛的な立場で戦ってきたが、戦後歴史学が精力を注いできたそうした運動は国民にとって歴史学者の問題でしかなく、歴史学者が大衆の歴史観という最も肝心なことについて何も把握できなくなっているのではないかと、という反省である。遠山は、「歴史学の固有な任務をおろそかにして、そうでないところで一生懸命ぼくらが精力をロスしていたのがこの20年間なんじゃないのかな」⁽⁷²⁾と自虐的に戦後歴史学の在り方を振り返っている。そして、歴史学固有の任務とは、現代を歴史的に把握し、明治維新といった史実の現代的意味を具体的に提起することだと述べている。こうした戦後歴史学の反省は、他の歴史学者にも共有されていた。それは、戦後歴史学が政府権力とイデオロギーの次元で対決している間に、国民は小説やテレビなど歴史家の書いたものとは別のルートを通して、あるいは、巧みに叙述された「歴史もの」を通して歴史像を形成しており、歴史学者がそれらの具体的内容を把握できていないばかりか、それらに代わる歴史像やその現代的意義を提示できていない、という危機感の表れだった。

おわりに

本研究は、大衆社会にとって「明治百年」とはどのようなものであったかを明らかにするため、主として新聞の社説等に見る「明治百年」を分析した。その結果、ナショナリズムの一言では片付けられない多様な歴史観の混在する大衆社会の様子が明らかになり、また人々の歴史像が如何に形成されたのかという議論に至った。

最後に、本稿で明らかになった内容と考察をまとめる。

まず、地方における明治百年記念事業は、公害などの社会問題を抱える当時の地方自治体が住民福祉事業として利用しようとしたことに加え、全国規模で祝いたい政府も反対意見の出にくい国土緑化運動を積極的に推進したため、建設や緑化といったハード面での記念事業が中心となった。結果的に、国家の一大イベントに対する一般国民の関心は低く、高度経済成長を背景に「明治百年」に踊る政府・大衆対歴史学者という構図が成り立っていたとは言い難い。

次に、「明治百年」という視点から当時の時代の雰囲気を探ると、時代の転換期であるがゆえに社会に不安や閉塞感があったことが分かった。その中で、とりわけ若者は、夢や目標を持ってない自らと未来のビジョンを描けていない国家とを重ね合わせて、現状との対比で「明治」を理想化する傾向にあった。ただし、ある特定の世代や地域が特定の歴史観を代表できるわけではなく、多様な歴史観が混沌としていたからこそ、「明治百年」という事実そのものは過去を振り返る契機として広く受容されたかもしれないが、政府主導の「明治百年祭」は盛り上がらなかった。

さらに、大衆の「明治」像は当時の「歴史ブーム」の中で形成されていったと考えられる。「歴史ブーム」は、政府の国家事業として始まったわけでも、歴史家の運動によって始まったわけでもなかった。大衆の歴史像を形成したのは、人々の様々な心理的需要に応じて、歴史を大衆にとって心地良いものにコーティングした歴史書や文学やテレビ番組であった。こうした媒体は、自らが生きてきた戦前の時代を戦後と切り離して否定するのではなく、古き良きものとして評価したいという人の思いに対しては、郷愁を呼び起こさせる「明治」を、夢や目標に飢えている人に対しては、理想に燃え強く時代を生き抜いた明治の人々の姿を提供することによって、本物の明治とは異なる「明治」像を広く人々の意識に浸透させ、その歴史像を形成したと考えられる。このように国民が政府や歴史家の言説以外のルートから歴史像を形成しているという事態は、国家権力への抵抗運動に精力を注いできた戦後歴史学者に対して深い反省を迫るものであった。

それでは、以上のような社会的雰囲気の中で、大衆は具体的にどのような「明治」像を形成したのか。それは、「明治150年」の地点に立つ我々の歴史観のあり方にも跳ね返ってくる問題である。これは今後の課題としておきたい。

注

(1) 例えば以下の論文が挙げられる。

- ・鈴木洋仁「『明治百年』に見る歴史意識——桑原武夫と竹内好を題材に」『人文學報（京都大学大学院人文科学研究所紀要）』第105号（2014年6月）。
- ・道家真平「『明治百年』と『近世化論』」『アジア遊学——「近世化」論と日本』第185号（2015年6月）。

- ・トパチョール・ハサン「戦後日本の記憶研究と歴史学者の記憶意識——明治百年祭（1968）を例に」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第63号（2017年3月）。
- ・宮本司「明治百年の道程——1960年代における日本戦後思想史の一ケース・スタディとして」『明治大学人文科学研究紀要』第83巻（2018年3月）。
- (2) 前掲注1 宮本論文, 246頁。
- (3) 前掲注1 宮本論文, 236頁。
- (4) 前掲注1 宮本論文, 227頁。
- (5) 「明治百年「つくられたブーム “記念” と商魂の相乗り」『岐阜日日新聞』1968年10月23日朝刊。
- (6) 伊藤盛雄「「明治百年論」の系譜」『新潟日報』1968年10月23日朝刊。
- (7) 前掲注1 宮本論文, 241頁。
- (8) ・『日本史研究』第95号(1967年11月)。
・『史学雑誌』第77編第9号(1968年9月)。
- (9) 歴史科学協議会「明治百年祭 反対運動総括小委員会「われわれの反対運動と「明治百年祭」のみじめな敗北」『歴史評論』第222号(1969年2月), 13-48頁。
- (10) 松尾章一「「明治百年祭」反対運動の成果と課題」『歴史評論』第220号(1968年12月), 6頁。
- (11) 歴史学研究会委員会「「明治百年祭」にたいする本会の基本態度」『歴史学研究』第341号(1968年10月), 1頁。
- (12) 「特集「明治百年祭」批判——現代ファシズムの思想と運動」『歴史学研究』第330号(1967年11月), 87頁。
- (13) 遠山茂樹「明治百年と憲法二十年」『教育』第208号(1967年5月), 9-10頁。
- (14) 前掲注1 宮本論文, 247頁。
- (15) 上原専祿, 江口朴郎, 朝永振一郎, 水田洋, 渡辺洋三, 遠山茂樹「学問のあり方と研究者の社会的責任」『歴史学研究』第270号(1962年11月), 1頁。
- (16) 自治文第136号(1967年10月)。
- (17) 総理府大臣官房『明治百年記念行事等記録』(未公刊, 1969年)。同記録は国立国会図書館に所蔵されている。
- (18) 表1参照。
- (19) 松本四郎「自治体と「明治百年祭」」『歴史学研究』第341号(1968年10月), 80-87頁。
- (20) 前掲注19, 85頁。
- (21) 「県民の森(中)」『中国新聞』10月25日朝刊, 8面。
- (22) 荒井信一, 遠山茂樹, 永原慶二, 中村正則, 三木亘, 山田昭次「座談会「明治百年」と国民の歴史意識」『歴史学研究』第320号(1967年1月), 1-15頁。
- (23) 福原麟太郎「祖国よ, 幸多かれ」『西日本新聞』1968年10月23日朝刊, 17面。
- (24) 「明治百年を機会に」『千葉日報』1968年10月23日朝刊, 1面, 「千葉県 百年の歩み」同6面, 「房総明治百年」同7面。
- (25) 論説「明治百年とあすの佐賀」『佐賀新聞』1968年10月23日朝刊, 2面。

- (26) 前掲注5。
- (27) 塩田庄兵衛「日本近代史の素顔(5)」『朝日新聞』(大阪版)1968年10月24日夕刊, 8面。
- (28) 社説「明治百一年目への覚悟」『神奈川新聞』1968年10月24日朝刊, 2面。
- (29) 「きょう明治百年記念式典」『朝日新聞』(大阪版)1968年10月23日朝刊, 14面。
- (30) 「官公庁きょう半ドン」『南日本新聞』1968年10月23日夕刊, 5面。
- (31) 「祝賀と反対と 明治百年記念祭」『中日新聞』1968年10月23日夕刊, 11面。
- (32) 原田久美子「「明治百年祭」と地方自治体——京都府百年記念事業をめぐって」『日本史研究』第98号(1968年5月), 67頁。
- (33) 前掲注1, 宮本論文, 244頁。
- (34) 前掲注1, 鈴木論文, 124頁。
- (35) コラム「中日春秋」『北陸中日新聞』1968年10月23日朝刊, 1面。
- (36) 高柳真三「新しい前進に当たって」『河北新報』1968年10月23日夕刊。
- (37) 社説「明治百年の真の意義」『南日本新聞』1968年10月23日朝刊, 2面。
- (38) 前掲注36。
- (39) 関根俊郎「工業社会と人間疎外」『朝日新聞』1968年10月24日朝刊, 4面。
- (40) 内閣総理大臣官房(明治百年)「明治百年に関する世論調査について」『時の法令』第651号(1968年8月)。
- (41) 前掲注39。
- (42) 1968年5月6日, アメリカの原子力潜水艦ソードフィッシュ号が佐世保港に入港していたが, その周辺で通常の10-20倍の放射能が測定された事件。この会談で, 米原子力軍艦の日本寄港について, 寄港中の一次冷却水放出は例外の場合であり, 今後日本の港においては「通常」放出されることはないことなどが約束された。「原則」放出しないことを要求していた日本が譲歩する形となった。
- (43) コラム「風土計」『岩手新聞』1968年10月23日朝刊, 1面。
- (44) 社説「アポロ7号成功の意義——谷間にある日本人の感情」『河北新報』1968年10月24日朝刊, 2面。
- (45) 前掲注28。
- (46) 社説「逆立ちしている明治百年」『河北新報』1968年10月23日朝刊, 2面。
- (47) 藤沢善次「金の額ブチ入りの“明治百年”」『新潟日報』1968年10月24日朝刊, 5面。
- (48) 金森祐之の作文, 長野県教育委員会編『あすにむかって——明治記念作文・論文集』1968年。
- (49) 谷村浩二の作文, 「新しい日本と私たちの使命」『西日本新聞』1968年10月23日朝刊, 19面。これは, 同紙主催の懸賞論文を掲載したものである。
- (50) 戦後の社会過程に一貫して顕著な、「滅私奉公」に代わる「滅公奉私」つまり私生活優先と、「封建的なもの」の否定に伴う「近代的なもの」への志向性と, 貧困を脱出する生産性増大への性向が相まって, 戦後の日本社会を席卷した私生活を優先する生活意識や生活様式のこと。1960年の流行語でもあった。
- (51) 谷野元良の作文, 前掲注49。

- (52) 前掲注46。
- (53) 「明治百年 上」『愛媛新聞』1968年10月23日朝刊, 5面。その他の同段落における情報も左記による。
- (54) 前掲注5。
- (55) 「“明治百年”をめぐる出版界の姿勢——近代再評価のために発掘される貴重な資料」『総合ジャーナリズム研究』第5巻1号(1968年1月), 23頁。
- (56) ・「盛んな復刻出版」『伊勢新聞』1968年10月24日朝刊, 5面。
・「盛んな名著の“復刻出版”」『愛媛新聞』1968年10月23日夕刊, 4面。
- (57) 片桐顕智, 杉村武, 田所太郎, 林四郎「座談会 マスコミの変遷」『言語生活』第182号(1966年11月), 6頁。
- (58) 前掲注57, 6頁。
- (59) 前掲注55, 27-28頁。
- (60) 前掲注17。
- (61) 「土佐と土佐人」『高知新聞』1968年10月23日朝刊, 2頁。なお, 2016年3月時点で累計2451万9千部に達する大ベストセラーとなっている。「産経WEST」ホームページ (<https://www.sankei.com/west/news/160331/wst1603310018-n2.html>, 閲覧日2020年1月12日)。
- (62) 前掲注61。
- (63) 「NHKアーカイブス」(https://www2.nhk.or.jp/archives/tv60bin/detail/index.cgi?das_id=D0009010123_00000, 閲覧日2020年1月11日)。
- (64) 前掲注57, 6頁。
- (65) 子母澤寛 [1892-1968]。新聞記者を経て大衆文学作家になった人物。『国定忠治』などの股旅物や『勝海舟』『父子鷹』など幕末維新期を主題にした作品で知られる。
- (66) 1967年に放送されたNHK大河ドラマ。幕末の動乱から明治維新までの時代を取り上げ, 旗本の薄幸な三姉妹と純粋で反骨精神の旺盛な浪人・青江金五郎の, 運命の変転を軸に描く。歴史上, 虚構の人物を取り混ぜ, 時代に翻弄されるさまざまな人間像が展開する。(出典: NHKアーカイブス https://www2.nhk.or.jp/archives/tv60bin/detail/index.cgi?das_id=D0009010131_00000, 閲覧日2020年1月12日)。
- (67) 松浦玲「「明治百年」とマスコミ」『日本史研究』第96号(1968年3月), 54頁。
- (68) 前掲注67, 55頁。
- (69) 前掲注22, 4頁。
- (70) 井上清『日本の歴史』岩波書店, 1963年。
- (71) 前掲注22, 6頁
- (72) 前掲注22, 9頁。